

発刊の辞／今西 順吉

東アジア仏教の視点から見た古写経研究／木村 清孝

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」の研究概要と現状、意義について／落合 俊典

《活動紹介》

公開シンポジウム「仏教古写経の意義をめぐって」

公開研究会・刊行物

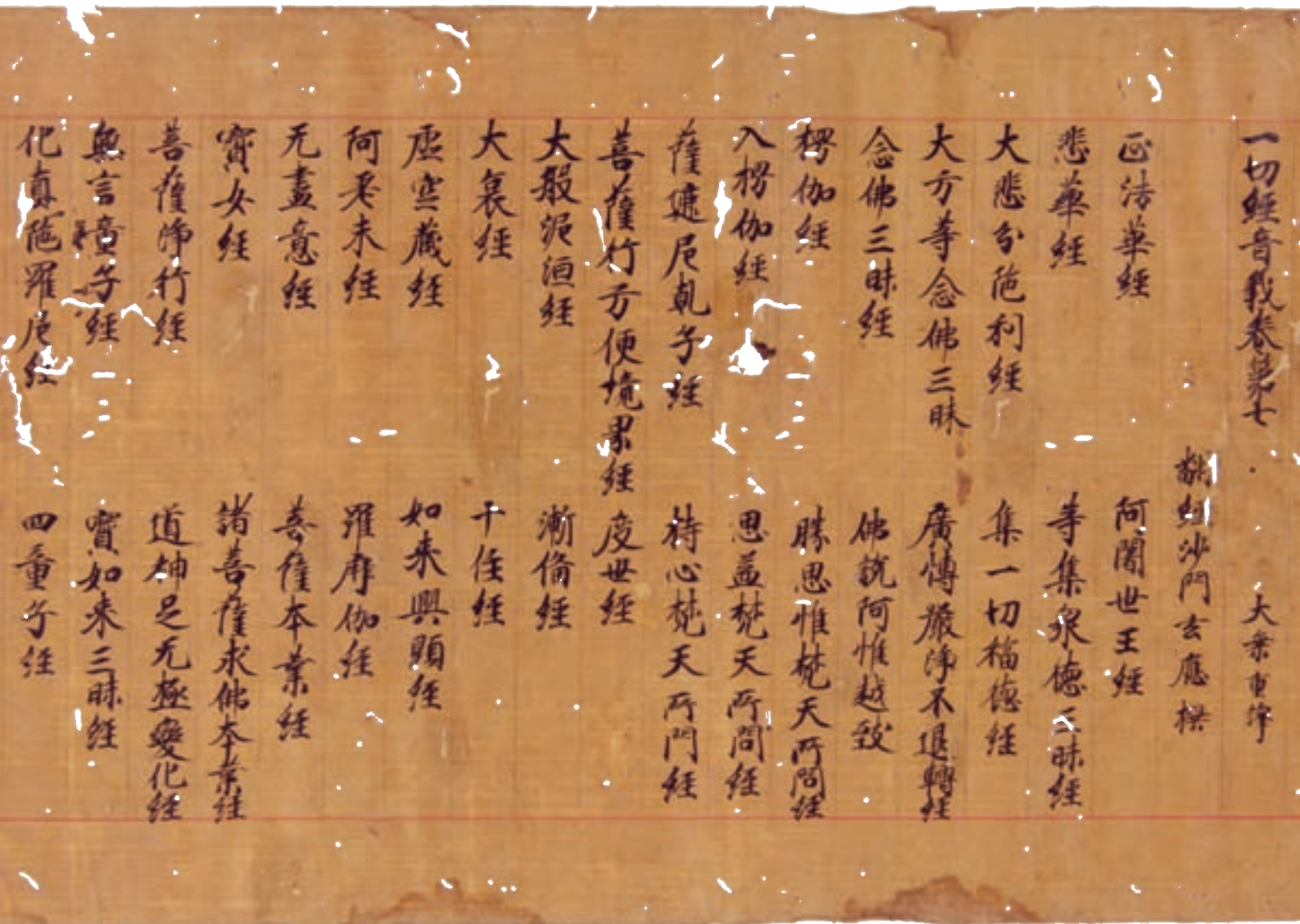
《古写経紹介 その一》

『摩利支天経』——金剛寺本と敦煌本——／方 廣鋤

《蔵の中》

金剛寺経巻の紐／道明 新一郎

古写経の死番虫／吉川 也志保



発刊の辞

国際仏教学大学院大学教授 今西 順吉

(国際仏教学院理事長)

日本海を隔てて大陸の縁辺に位置するわが国には古来異国の人と文化が頻繁に渡来し、その記憶とともに多種多様な文化財が大切に保存されてきました。正倉院はまさにその象徴的存在です。

しかし刊本大蔵経が刊行される以前の写経が中国ではほとんど消滅してしまった現在、正倉院の聖語蔵や奈良平安時代の古写経が敦煌写経とともに、刊本大蔵経以前の写経あるいはその伝写本として、一切経の古型あるいは原型を回復するために貴重な意義を有するという発見に、胸の高鳴りを覚えない人はいないでしょう。しかしシルクロードに馳せる夢とは違って、奈良平安古写経に対しては、その課題の大きさを思えば、単にロマンティックな夢を抱くだけではすまされません。

一切経の写経のためには多大な労力と資金が不可欠ですが、紙に書かれた写経がどれほど亡びやすく、どれほど多くの写経が度重なる戦乱・焼き討ち・失火によって消滅したかを思えば、大量の写経が現代にまで保存されてきたという事実は真に驚嘆すべきことです。それだけに千年前後の長期間にわたってこれら古写経の保存と護持のために関係者が払われた御労苦は想像を絶するものがあります。

日本文化は海外の文化を受容することによって豊かに展開しました。そして古写経に学問の新たな光を注いで、古写経が本来もっていた意義を再発見することは、一切経の原型の復元という国際的に極めて価値の高い事業に対する貢献であるとともに、この事業を通じて日本仏教のみならず日本文化の再評価と再確認に道を開くこととなります。

平成十七度にスタートしたわれわれのこのプロジェクトはさいわいにして国内外の研究者の協力のもとに推進されており、その研究成果は公開研究会やシンポジウムにおいて発表され、諸種の出版物を通じて公表されます。このニュースレターはその状況を報告するとともに、広い範囲の研究者の研究交流の場となることを願って発刊されるものであります。

(研究代表者)

東アジア仏教の視点から見た古写経研究

国際仏教学大学院大学学長 木村 清孝

約二千五百年前、インドのガンジス川中流域で誕生した仏教は、その後、インド各地のみならず、周辺の諸国へと伝えられていった。このうち、中国に伝来し、やがて韓国(朝鮮)・日本を含む東アジアのほぼ全域に広まった仏教を、総称して「東アジア仏教」と呼ぶ。この「東アジア仏教」のもっとも基本的で重要な特徴は、漢訳仏典(漢語⇨古典中国語に翻訳された仏典)をよりどころとする、ということである。

ところで、一般に経・律・論の三蔵に区分される仏典の数は、きわめて多い。開祖釈尊の教説とされる「経」だけでも、大乘経典まで含めると長短合わせて数千に上るが、それらの仏典のうち、かなりのものが諸言語に翻訳されて残っている。「漢訳仏典」は、二世紀以来、訳経僧を中心に遂行されてきた仏典中国語訳の集積であり、パリー語仏典群、チベット語仏典群と並ぶ仏典の一大宝庫にはかならない。東アジア諸国では、仏教が人々の心の支えとなつて流布するのに伴って、それら漢訳仏典の書写と整理が繰り返され、印刷技術が発展してくると、その大掛かりな編纂・刊行も何度か行われた。前世紀の前半、日本で公刊された「大正大蔵経」全百巻は、その一つの集大成であり、刊行以来、内外を問わず、研究上もつとも權威ある漢訳仏典叢書とされてきた。

しかし、前世紀初頭に敦煌で大量の古写経(その大半は漢訳仏典)が発見され、各国にもたらされて、一部の研究者たちに知られ始めた。そして、やがて国際的な協力の下でそれらの全貌が写真版等によって明らかにされ、研究も次第に進んできた。すると、それらの中に、一方では、「大正大蔵経」などの大蔵経類には収められていない貴重な仏典が存在すること、他方では、大蔵経類に収められている漢訳仏典の底本などよりも古く成立したものや信頼性の高いものがあることなどが分かってきた。こうして、大蔵経類その他の「刊本」だけに頼ってはいは、しつかりとした仏教研究を進められないことが明瞭になったのである。

上に述べた敦煌発見のものと並ぶ、あるいはそれ以上に貴重な古写経類を所蔵するのが、わが国の寺社等である。現在われわれは、日本に現存するそうした諸文献を網羅的に調査し、その研究を精力的に遂行している。完成の暁には、おそらく仏教研究、とくに漢訳仏典を多く利用する東アジア仏教の研究に対して、それが全体としてより望ましい方向に大きく変わっていくための確乎たる基盤を提供するとともに、新しい先駆的な諸成果を開示できることになる。今から楽しみにしていただきたい。

目 次

発刊の辞	今西 順吉	(1)
東アジア仏教の視点から見た古写経研究	木村 清孝	(1)
学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」の研究概要と現状、意義について	落合 俊典	(3)
《活動記録》		
公開シンポジウム		(5)
公開研究会・出版物紹介		(6)
《古写経紹介 その一》		
『摩利支天経』—金剛寺本と敦煌本—	方 廣鋤	(7)
《蔵の中》—トピックス—		
金剛寺一切経の紐	道明新一郎	(9)
古写経の死番虫	吉川也志保	(10)
《寺院紹介》		
金剛寺		(13)
七寺		(14)
《調査日記》		
金剛寺		(13)
七寺		(14)
《今後の活動予定》		(15)
《スタッフ紹介》		(15)
《次号紹介》		(15)

いとくら：「経蔵」のやまとことば読み。奈良・平安期の古写経を研究をするところから、古写経を収蔵する経蔵の、その時代の読みをニュースレターのタイトルとしました。

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」の研究概要と現状、意義について

落合 俊典

本研究の意義について

奈良時代から平安・鎌倉時代にかけて書写された一切経は相当数に上るが、その中今日まで連綿として受け継がれてきた一切経は両手で数えるばかりになってしまった。そしてどういう訳か、これらの本来的な研究——文献学に基づく厳密な研究——は殆ど行われてこなかった。仏教研究のテキストとしてよりも、古写経文化財として価値を有するものとされてきたのである。文化財となれば仏教の研究者がテキストクリティーク（校訂）の1本として用いることは必ずしも容易ではない。しかし、テキストが提供されないばかりでなく、これを用いようとする研究者も殆ど現れてこない状況であった。近年、正倉院聖語蔵の経巻がカラーCDとして市に出回るようになったが、その販売実績は芳しくなく、また聖語蔵を参照して研究成果を発表したという話しも殆ど耳にしない。これは単に高価であるからというのではなく、一般的に日本の古写経に対する位置づけが低いことに原因がある。

大正新脩大藏経の底本には高麗版が採用

され、対校本として宋版、元版、明版が用いられている。もちろん聖語蔵、その他の古写経や江戸時代の刊本なども用いられているが、基本は12、13世紀に刊行された木版大藏経に拠っている。確かに高麗版などは「厳密」な校訂をしたと謳われているが、矛盾する先行文献の問題解決に高麗時代の価値判断がなされた感が強いように思われる。

隋唐時代に確立した聖典テキストとしての一切経は、盛唐の開元十八年（730）に成立した『開元録』に依拠する。十世紀末北宋時代に刊行された開宝蔵（北宋勅版・蜀版）もこれに基づくものであった。筆者が実際に手に取り閲覧した、盛唐時代に長安で書写された「宮廷写経」は実に見事なものであり、また最初の刊本一切経 開宝蔵も最高度の精美な聖典本であった。この二者間に根本的な相違など存在しないように思うのはむしろ当然であろう。だが、不思議なことに細部にわたる文字の異同ばかりでなく換骨奪胎された経典も数点確認されてきている。聖典テキストは仏教教団にとって最も重要なコアであるから変化が起こりにくい

部位である。それにも係わらず変化が生じているのは何らかの背景があったればこそであろう。そこには必ずや思想的な変動のドラマが存在したと考えられるのである。

本研究の現状

日本の奈良平安古写経の総体は驚くほど豊饒である。もとより、最も重要な奈良写経の現存品は千巻余と限られているが、平安・鎌倉写経を加えると数万巻に達する量となる。

九世紀初頭、弘法大師空海によって将来された『貞元録』に拠って全体を復元してみようというのが提案である。『貞元録』は高麗版に収められているものと、日本の古写経に残るものとは細部にわたって相当異なる。そのため古本『貞元録』のなかで最も善本とされる七寺本を用いた。その最初の研究事業は、七寺本『貞元録』を基準とした現存一切経の対照目録の作成であった。かくして成った『日本現存七種一切経対照目録』（暫定版）の上梓のあと、敦煌本との対照も含め、新たに石山寺一切経を加えて『日本現存八種一切経対照目録』を今年度の研究成果報告書として刊行した。この目録を座右に置いて各地に残る古写経を博搜すれば一部一巻の遺漏もなく『貞元録』の描いた唐仏

教と平安仏教の基本典籍の復元が可能となる。

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」が成功するかどうかはひとえに所蔵寺院の寛大な理解と協力にかかっているが、幸いどの寺院も学術研究への深い理解を持たれ、この研究事業の成果を期待されていることは誠に僥倖であった。加えて日々高度化するデジタルIT化の流れも強力な応援団となった。本事業に先行する形で「金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究」（平成12年度～平成15年度。科学研究費基盤研究（A）（1）、「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」（平成16年度～平成18年度。科学研究費基盤研究（A））とが行われてきたが、これらにおいてまさに一切経のデジタル画像化の研究が進展しつつあった。この蓄積の上に京都国立博物館、京都大学人文科学研究所、和歌山大学、大谷女子大学等に属する研究者の積極的な協力を得て研究が開始された。

平成12年度からの科研による研究事業も含めて、すでに今年度末で三千巻余のデジタル画像がサーバーやHDD等のストレージに蓄積された。当面の目標は五千三百巻余であるから、研究事業五カ年内の復元達成は可能であろう。

活動記録

公開シンポジウム

国際仏教学大学院大学学術フロンティア主催の「仏教古写経の意義をめぐって——奈良平安写経と敦煌写経」が二〇〇六年二月二十五日午後、東京渋谷・フォーラム8のホールで開催され、古写経研究の意義と方法について、日中の研究者四名がそれぞれ異なる角度から実例を挙げながら検証した。

まず、中国上海師範大学の徐時儀教授が「玄應『一切経音義』の流伝と版本の考察」をテーマに講演した。徐教授は、日本現存の『玄應音義』写本と敦煌トルファン写本に、版本大蔵経には決して見出せない内容が含まれているため、諸伝本に見られる相違に着目すれば、版本大蔵経所収の『玄應音義』の諸系統の特徴が判明する可能性があることを示唆し、「写本一切経は、仏教大蔵経の伝承に関する研究にとつても、無視できない学術的価値を有している」と強調した。

続いて、京都大学の高田時雄教授が「音義の歴史から見た玄應音義」を主題に、中国における音義の歴史の中に『玄應音義』を位置づけようとする場合、音義という広い枠



パネルディスカッションの様子

組みの中に玄應の音義を置いて捉える必要性があると論じた。高田教授は、音義という儒家の經典読解の形式が仏典解釈に応用されたのは斬新な試みであるとする一方で、仏教の音義がなお六朝以来の学問伝統と深く結びついていることを意味するものと捉え、「玄應のような比較的早い時期に成立した音義については、より広い中国の学問伝統の中で理解すべき点が多い。」と指摘した。

花園大学の衣川賢次教授は「日本と中国の古写経による仏典校訂の試み——『法句譬喻経』を例として——」をテーマに講演した。衣川教授は、かつての藤枝晃先生の「敦煌写経によって大正蔵を校訂し、新たな定本を作成しよう」という提案に応ずべく、また、「最近の落合俊典教授の『日本の奈良平安一切経は、古い形態をよく留める点におい

て高い価値を有する』という認識を受けて、『法句譬喻経』について検証を試みたという。その結果、「写本系と刊本系のあいだには系統的な差異が存すること、写本系の古い素朴または晦渋な語句や表現が、刊本では通達、洗練されたものに改められ、文字の字体も当世通行のそれに書き改める傾向にあること」を確認し、漢訳仏典を言語資料として厳密な語彙語法の研究をおこなうには、敦煌写経や奈良平安写経などの古写経に拠るべきであると指摘した。

最後に、上海師範大学の方廣鋤教授が「敦煌遺書と奈良平安写経の異同」を題に発表した。方教授は、古代の大蔵経の持つ理的・信仰的機能に着目しながら、敦煌遺書と奈良平安写経との異同を考察し、敦煌遺書の研究価値が蔵外文献を中心としているのに対して、大蔵経を原本とする奈良平安写経は漢文大蔵経の研究において、文献そのものや大蔵経の発展と表現形態を研究するために重要な意義を持つているという。更に方教授は、今回の公開シンポジウムの意義について、従来それぞれ別個の分野として展開されてきた敦煌遺書と日本古写経という二つの研究分野を相互に結びつけようとする試みは、まさに古写経研究に新たな地平を開拓するものであると高く評価した。

講演後のパネルディスカッションでは、総勢百十八名の出席者から回収したアンケートや質問表に基づいて、四名の講演者が一時

間にわたって丁寧かつ平易に質疑に応じた。最後に、公開シンポジウムの司会を務めた国際仏教学大学院大学の今西順吉教授は、中国において仏教を受け入れた際に、その受け皿としての中国文化というものが既に学問的な形を持つており、その形に応じて仏教を受け入れたということが理解できるが、これを日本文化の場合について考えると、仏教を日本で受け入れた際に、その時代の日本に、どれだけの受け皿ができていたのか、そういう中で注釈書『三蔵義疏』『法華義疏』『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』を作ろうとすればどういふことになるのか、そういう角度から考える必要があるのではないか、という新たな問題意識を提示した。

(研究員(PD)、池 麗梅)



会場では、金剛寺蔵『大乘起信論』や京都大学文学部蔵『一切経音義』の複製の展示や、来場者に配布された『日本現存七種一切経対照目録(暫定版)』CD-ROMのデモンストレーションも行われた

当日は各分野の専門家など、100名を超す来場者があった



公開研究会

今年度の学術フロンティア公開研究会は、本学にて二回に渡り行われた。日時、発表者、および発表題目は次の通りである。

○第1回公開研究会

平成17年9月17日(土)午後2時半～4時半

村川猛彦(和歌山大学講師)「仏典データベースシステムにおける前処理自動化の試み」

落合俊典(国際仏教学大学院大学教授)「唯識論序と大乘唯識論序」

今西順吉(国際仏教学大学院大学教授)「写本・大藏経と流布本」

○第2回公開研究会

同年12月17日(土)午後2時半～4時半

能島寛(浄土真宗本願寺派宗学院研究生)

「親鸞の用いた『往生礼讃』」

梶浦晋(京都市大学人文科学研究所助手)「日本における一切経書写の歴史―現存例を中心として―」

アレクスフロリン(国際仏教学大学院大学教授)「『安世高の訳出経典と『安般守意經』金剛寺本について』」

村川氏は、高精細デジタルカメラで撮影された古写経の閲覧や読解を支援するデータベースの構築について、スクリーンで実際に例を示しながら講演された。

落合氏は、日本の古写経を資料として、大正蔵本の真諦訳『大乘唯識論』に付せられている序文が本来は菩提流支訳『唯識論』に付せられるべきものであることを示し、大正蔵本の問題点と日本の古写経の有する価値について説明された。

今西氏は、インドの仏典やアビダルマ文献を例にとりながら、奈良平安時代に遡りうる日本の古写経がテキストの翻訳・伝承・流布の由来を知る上で極めて重要な価値をもっていることを論ぜられた。

能島氏は、古写経の読みをもとに、親鸞の名著『教行信証』に引用される『往生礼讃』がもともと不備のみられた『集諸経礼懺儀』に校正を加えたものであるとの可能性について言及された。

梶浦氏は、天平時代と平安中期～鎌倉時代の中心に、一切経書写の歴史や写経本の伝存状況について解説された。

アレクス氏は、金剛寺で発見された安世高訳『安般守意經』が従来知られてきた大正蔵本と非常に異なっていることについて論ぜられた。

公開研究会は第1回目も第2回目も予定時間を超過したが、活発な質疑応答も見られ、会は盛況のうちに終了した。

(研究員(PD)、林寺正俊)



第2回公開研究会の様子

出版物紹介

平成十七年度の研究報告として、まず、九月に『日本現存七種一切経対照目録(暫定版)』を刊行した。過去に諸機関から発行された一切経の調査報告書に基づき、現存する奈良平安古写経の存欠状況を一覧化したものである。聖語藏(写本)、金剛寺一切経、七寺一切経、興聖寺一切経、西方寺一切経、名取新宮寺一切経、妙蓮寺蔵松尾社一切経の七種を『貞元釈教目録』の順に収録し、大正蔵番々からも検索できるよう索引を付けた。十一月には、これに敦煌仏教文献の存欠を加えて「暫定第二版」を発行した。また、CD-ROM版も発行し、当プロジェクトの研究関係者、及び、二月二十五日の



『日本現存七種一切経対照目録(暫定版)』とCD-ROM

公開シンポジウム参加者に配布した。本書によつてようやく一切経の現存状況を一望できるようになった。今後の研究にも多いに役立つことが期待される。本年度末には、石山寺一切経の存欠を加えて『日本現存八種一切経対照目録』として刊行する。

本年度のもう一つの出版物は、日本古写経善本叢刊 第一輯『玄心撰一切経音義二

十五卷』である。『玄心音義』の影印と解題(高田時雄氏、落合俊典氏他)を収める。

『玄心音義』は、一切経に見られる難解な語句の読み(音)や意味(義)を記した辞書である。中国唐代(七世紀)成立、二十五卷。特に中国言語学(音韻学)や日本の古辞書研究において重視されているが、当時用いられていた四百五十以上の仏典を収録することから、仏教学においても重要である。

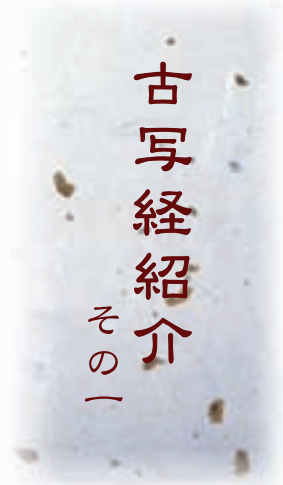
今回影印紹介するのは、金剛寺蔵鎌倉中期写本二十一巻分、七寺蔵平安後期写本二十巻分、東京大学史料編纂所蔵平安後期写本(七寺一切経)巻十五、西方寺蔵鎌倉中期写本九巻分、京都大学文学部蔵平安後期写本(石山寺一切経)巻六・巻七の計五十三巻分である。

以前から宮内庁書陵部蔵大治三年写本が善本として用いられているが、これは巻三八が欠落している。広島大学や天理図書館所蔵の石山寺本を加えてもお巻六・八が足らず、高麗版大藏経で代用してきた。今回の影印はその欠を補う。また、『玄心音義』は伝本間に様々な異同があるが、本書によつてその比較検討が可能となる。これは、『玄心音義』研究にとっては言うまでもなく、一切経の系統研究にも有用である。なお、本書は、日本古写経善本叢刊の第一輯として発行する。次年度以降、『大乘起信論』『集諸経礼懺儀』『優婆塞五戒法』などの古写経善本を随時紹介していく予定である。

(研究員(PD)、箕浦尚美)

古写経紹介

その1



このコーナーでは、フロンティアの研究活動において調査された古写経から毎号一つの経典を取り上げ、それに関連する内容を紹介していきます。

『摩利支天経』

—金剛寺本と敦煌本—

上海師範大学教授 方 廣鋳

大阪天野山金剛寺所蔵の平安時代の写経の中に、『摩利支天経』という経典の写本があり、現在、「録外2」という整理番号を持っている。その内容によれば、摩利支天という神がおり、それは姿を隠して見えなくなる不思議な力の持ち主である。もしその名を知る者がいれば、その庇護を受け、「行路中護我、非路中護我、夜中護我、昼日護我、賊難護我。病難護我。水難護我。火難護我。於惡怨家護我」等とあるような苦難と災害から逃れられる、とされている。摩利支天から庇護を受けるためには、「我某甲知彼摩梨

支天名(我某甲、彼の摩梨支天の名を知れり)云々と唱えて祈願しなければならない。更に、その経典の中では「若有書写読誦受持、著髮中、著衣中、隨身如行者、一切諸惡、悉皆退散。無敢当者、是故汝等应当勤心流布此経(若し書写し読誦し受持し、髮中に著し、衣中に著し、隨身して行けば、一切の諸惡、皆悉く退散す。敢えて当たる者無し、是の故に汝等よ、応に勤心し此の経を流布せよ)」と強調されている。

この『摩利支天経』は、大正蔵の中では四種の異本が収められている。一つは失訳(訳者不明)の附梁録である。二つ目は『陀羅尼経』卷十の中に収められており、唐天竺三藏阿地瞿多によつて訳出されたものである。他の二本は、いずれも唐代の不空の訳と伝えられるものである。高麗蔵本と嘉興蔵本との相違が大きいため、大正蔵はその両方を収めている。金剛寺本は、その四種のテキストと較べて基本的な内容は一致しているが、文書の書き方に顕著な差異が認められ、明らかに新しい異本の一種である。文の流れから見ると、金剛寺本は、失訳本と不空訳本との両者から採録・改編したものと思われる。では一体、誰が如何なる目的のためにこのような斬新な『摩利支天経』を製作したのであろうか。『摩利支天経』という経典は当時の人々の心中においていかなる地位を占

めていたのであろうか。敦煌遺書が、この問題を解明する鍵を提供してくれる。

敦煌遺書には、内容がほぼ同じである『摩利支天経』の写本が十七点ある。その十七点とは、P3110(1)・P2805・P3136(3)・P3824(5)・S2681・BD15366・甘博16(3)・S5391・上博48(17)・P3759・S5646(4)・S2059・S5392・S5618(4)・P3912(1)・S5531(6)・BD1598(2)である。このうちS2059「仏說摩利支天菩薩陀羅尼経」には序文が冠されている。それによれば、著者張球は「内見此経、便於白絹上写得其咒、発心頂戴(此の経を内見し、便ち白絹上に其の咒を写し得たり、発心し頂戴す)」となっている。咸通元年(八六〇)十一月、張球は使節として遣わされた。同行者には氷河に陥つたものもいたが、彼は助かった。その後、「涼州新復、軍糧不充」のため、張球は涼州へ食糧を搬送するように命令され、彼の後に出発した「省使五人」は全員盗賊に殺害されたが、彼は無事に任務を達成した。張球は、長安に派遣されて唐の皇帝に謁見することもあり、「賊路を往返すること前後三、二十出」もあったが、摩利支天から「菩薩加持力」を受けたため、いずれも平安無事であったという。そのため、彼は自ら深く信仰する『摩利支天経』を再び抄写するにあたって、序文を著して、その経典が広く流布するように祈願したのである。

ある。

『摩利支天経』の本文によれば、もし発願して摩利支天に庇護をこい求める者がいれば、必ず「我某甲知彼摩梨支天名(我某甲、彼の摩梨支天の名を知れり)」と唱えるべきだとされている。この一句がS2059では「弟子張球知摩利」となっており、具体的に祈願者の名前が記されていることから、張球の感謝と敬虔な心情が察知できる。似たような発願文はほかにも見られる。例えば、勝富という人物が書写した『摩利支天経』(S5391)の中にも、「弟子勝富婆娑詞、告告比丘」云々と記されている。イギリスの大英博物館やフランスの国立ギメー東洋芸術博物館所蔵の摩利支天の彩色画本からも、古代敦煌地域における摩利支天の信仰がうかがえる。

古代敦煌の繁栄は、シルクロードの要所にあるという、その地理的位置によるものである。したがって順調かつ安全な交通ルートの確保は、敦煌の地域発展そのものにつながる重要な一環であった。唐代の安史の乱以後、相当長い間にわたり、敦煌と内地との交通はかなり困難であった。このような背景があつたためか、敦煌遺書の写経の中に「王路開通」を願う発願文は頻繁に見られる。唐の大中十二年(八五八)、敦煌の帰義軍政権は、交通ルートを確保するために大軍を

遣わして吐蕃を討伐させたことが、BD05825の記載によって判明している。そのような事情の中で、「行路中護我、非路中護我、夜中護我、昼日護我、賊難護我」という利益を説く『摩利支天経』は、古代敦煌の人々、特に張球のような使節をつとめる者にとつては当然魅力的であつたと思われる。敦煌遺書から見出された七点にもおぼる写経が、いずれも帰義軍時代（八五一～一〇三五）の写本であることから、敦煌における摩利支天の信仰は、その時期においてピークに達したと思われる。

このように、金剛寺本『摩利支天経』の底本は、中国から伝わり、古代の中国人が摩利支天の庇護を祈願するために、大蔵經本に拠りつつも改編したテキストであることがわかるのである。この種の改編本は写本として民間で流布したもので、その形態は非常に変わりやすいものである。現存する十七点の『摩利支天経』敦煌写本の形態は互いに異なっており、幾つかの系統に整理することが可能である。紙幅の都合により、ここでは詳論を避ける。（この原稿の作成にあたって、落合俊典先生、青木進、林敏両君にご助力頂いた。ここに記して謝意を表す。）

（平成17年12月1日～18年2月28日、本学客員教授



- 0 摩梨支天菩薩陀羅尼經
- 1 歸命三世諸佛菩薩。如是。我聞。一時婆伽婆
- 2 住舍衛城給孤獨園。爾時世尊告諸比丘言。諸
- 3 日天子前有名摩梨支天。常行日前。彼摩
- 4 梨支天無人能見。無人能捉。不爲人縛。不爲
- 5 人欺誑。不爲人責。其財物不爲怨家能得
- 6 其便。諸比丘。若有人知彼摩梨支天名者。亦不
- 7 可見。不爲可捉。不爲人縛。不爲人欺誑。不爲
- 8 人責。其財物不爲怨家能得其便。諸比丘。若
- 9 善男子善女人知彼摩梨支天名者。應作是
- 10 言。我某甲知彼摩梨支天名。故無人能見我。
- 11 無人能投我。不爲人縛我。不爲人欺誑我。不
- 12 爲人責我。財物不爲怨家能得我便。爾時
- 13 世尊而說咒曰。
- 14 多軼他。遏伽摩四。未伽摩四。烏徒摩四。支婆
- 15 羅摩四。摩訶支婆羅摩四。安多離陀那摩
- 16 四。行路中護我。非路中護我。夜中護我。晝日護
- 17 我。賊難護我。病難護我。水難護我。大護我。
- 18 於惡怨家護我。呵羅居隸。呵羅居隸。無
- 19 離鴉帝。無離鴉帝。離知帝。一切處護我蘇婆
- 20 呵。
- 21 佛說是經已。告諸比丘言。諸比丘。善男子善
- 22 女人。比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。国王大臣諸
- 23 人民等。知彼摩梨支天名及陀羅尼。一心受持
- 24 者。不爲如上說諸惡所害。諸比丘。若有書寫讀誦受持。
- 25 著髮中。著衣中。隨身如行者。一切諸惡悉皆退
- 26 散。無敢當者。是故汝等應當歎心流布此經。說此
- 27 經時。諸比丘聞說經已。歡喜奉行。
- 28 摩梨支天經
- 29 一校已

〔録文完〕

※俗字・異体字に関しては通行の文字を用いた。

金剛寺本では「摩梨支天經」とあるが、ニースレーターでは、基本的に貞元録における名称「摩利支天經」を用いた。

金剛寺一切経の紐

道明 新一郎

昨年末、国際仏教学大学院大学落合俊典教授のお取りはからいで、河内長野市天野山金剛寺所蔵一切経を拝観させていただいた。左はその報告記である。

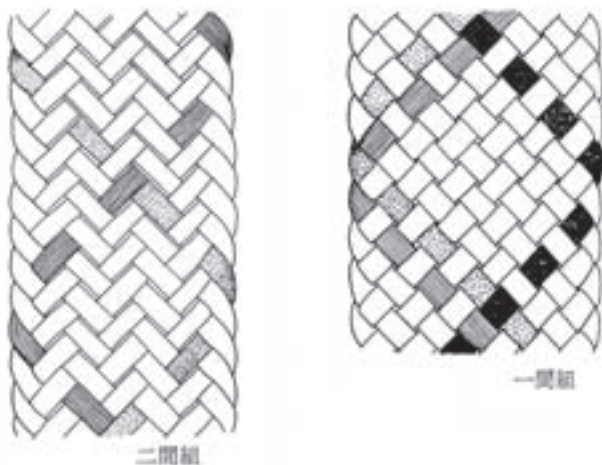
経巻や絵巻物などの卷子本には、普通、巻緒がつけられ、それを巻いたり解いたりして巻物を開閉する。「ひも解く(繻く)」の語はここからでる由。

この巻緒は奈良時代には「綺(かんばた)」とよばれる織物の紐であったことが『東大寺献物帳』(国家珍宝帳)の記述から窺える。同帳の冒頭部には『楽毅論』等巻物類が記載されているが、その全部に「綺帯」がつけられていたことがわかる。残念ながら現在は一本も残っていない。

平安時代になると、智証大師円珍(八一四〜八九二)の『入唐求法目錄』についていた巻緒が残るが、これも綺と言わ

れている。経糸と緯糸から成る織物風の組織で、後世の真田紐に通ずる横縞の模様の紐である。現在京都の聖護院に蔵されている。

平安時代後期には、相交わる二条の糸筋の交差角度が斜めになる組紐組織の巻緒が出現し始めたようだ。因みに交差角度が直角のものを織物組織と言う。組織は二間組が主流であった。各条同士が交差するとき、一条は他の二条を超えさらに別の二条をくぐり進んでいく。これを二間組と言う。同様に、交差が一条ずつの場合は一間組と言う(図参照)。一間組は精緻緊密で、二間組は



〔図〕『正倉院の組紐』(宮内庁蔵版/正倉院事務所編、平凡社、1973)より。

ゆるく伸縮性がある。柄はどちらも主として山路柄・斜め格子柄が組みだされる。

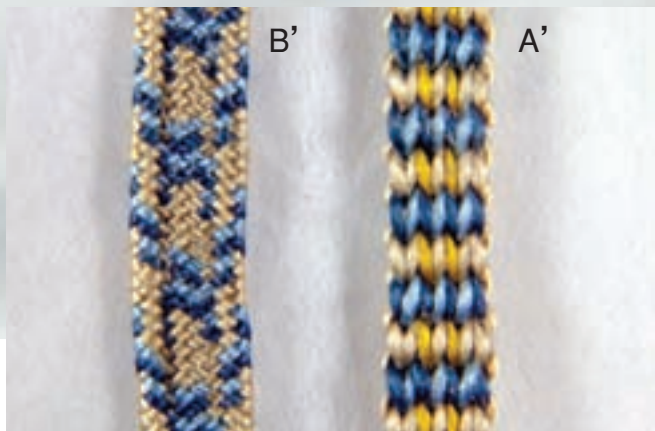
正倉院の『最勝王経』の経帙の巻緒は一間組であるが、経巻の緒には残っていない。製作年代がわかる巻緒は神護寺の一切経帙及び経巻の巻緒であろう(久安五年一一四九年)。ともに二間組であり、経帙は段染め(染め分け)である。また、二間組の組織を変形させて意匠を複雑にしたものに、厳島神社の平家納経がある(仁安二年一一



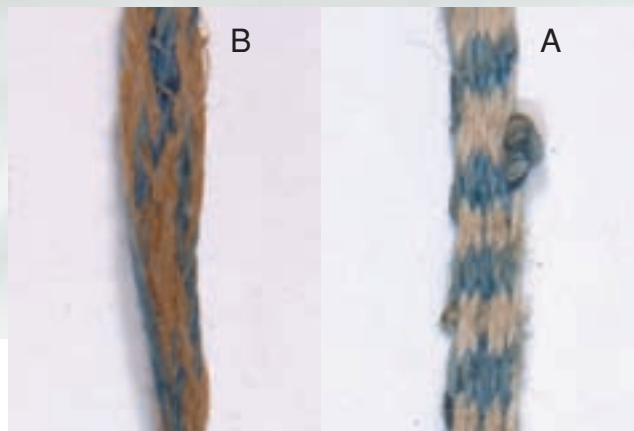
〔写真1〕金剛寺蔵『大般若経』の紐とその拡大図。経糸と緯糸の直角交差した巻緒は珍しい。

一六七七年)。江戸時代に付け変えられたものは一間組の段染め。同じような意匠に、湖東百済寺の『法華経』(平安後期)、高野山の一切経の一部がある。

金剛寺の一切経の巻緒は、組織と柄(デザイン)で大きく二つのグループに分けられる。一つは『大般若経』のグループ(A)、もう一つは『大般若経』以外のグループ(B)である。(写真1〜3参照) Aは非常に珍しいものと言えよう。ま



【写真3】A, Bの復元品。糸はともに二十一デニールの釜糸を、Aは一条十本、Bは一条七本用い、染色は青には藍染め、白茶は丁子染め、黄は黄蓮染めをほどこしたものの。



【写真2】金剛寺一切経の紐A(右)とB(左)

ず、組織は、一間組・二間組の斜め交差ではなく、経糸と緯糸の直角交差である。柄も格子や山路の斜め柄ではなく横縞である。これは古代の綺帯風を模したのでないかとも思われる。意図的に行われたかどうかはわからないが、『大般若経』に限定して施されたことは注目し値する。

Bは二間組の組織で柄は斜格子もしくは山路で、時代的にも極めて正統的である。AもBも組紐としては基本的なものであり、組み方で製作年代を論ずることはできないが、『大般若経』だけ巻緒を特別にしてある事実は興味深い。

A 幅五ミリ 長さ約三十五センチ 構成
糸条数十六(紺四、藍三、白茶四、黄二)
B 幅四ミリ 長さ約三十三センチ 構成
糸条数十七(紺四、藍四、白茶九)

【執筆者紹介】

道明 新一郎(どうみょう しんいちろう)

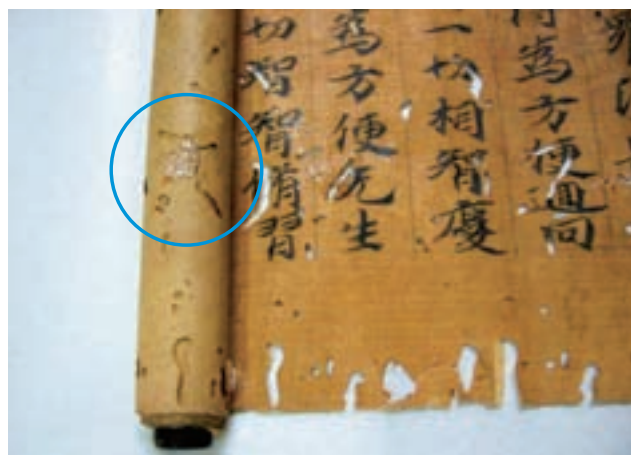
昭和十二年(一九三七)東京生。東京大学文学部美学美術史学科卒。フランス政府給費技術留学生(リヨン染織学校)。(株)有職組紐道明取締役会長。正倉院をはじめ、各地の神社仏閣の組紐遺品の調査・研究・復元に従事。経巻類では中尊寺一切経、厳島神社平家納経緒、神護寺一切経経帙緒、浅草寺経緒等々。

古写経の死番虫

吉川 也志保

古文獻などを扱う調査では、虫損のある書籍を見る機会が多いのではないだろうか。ここでは、こういった調査で見られる虫について写真をまじえて簡単に紹介したい。なお、ここで挙げた写真で出典の記されていないものは筆者の撮影によるものである。

本の中によく生息している白く光る体長9mmほどの昆虫といえば、まず紙魚(ししみ)を思い浮かべるだろう。偶然このたぐいの虫を、写経を開いているときに軸側の紙背



【図1】古写経からでてきたシミの死骸



【図2】シミの死骸拡大図

で発見したことがある(図1・図2)。ありふれた虫なので発見というほど大それたことではないのだが、写経の軸に巻かれた料紙に、「紙」の「魚」と書く名前の通り、まるで小さな魚のような虫が張り付いていた。白い鱗粉が擦れて黄檗染めの料紙の表面で光っているのがわかる。誰かが写経を巻き戻すときに、逃げ遅れたシミが巻き込まれてきつく紙と紙の間に挟まれてしまったまま長年放置されていたのだろうか。このように、古写経を含めて書籍から虫の死骸がでてきた場合は、死骸から発生するカビや、さらにそういった害虫の死骸を食する昆虫の誘引を防ぐた



【図3】ヤマトシミ(*Ctenolepisma villosa*)の成虫(東京文化財研究所編『文化財害虫事典』クバプロ, 2001年, p.20より)

めに、早急に除去する必要がある。また、虫糞も刷毛で払うなどして、可能な限り取り除くのが望ましい。

ただし、写真(図1・2)で見られるような写経の虫喰い穴は、このシミによるものではないことを、ここでは強調したい。このような食害痕を生じる張本人が、主にシバンムシであることは、今日では書籍保存に関する分野の人々の間で広く知られるようになってきている。シミは、一生のあいだ脱皮を繰り返しながら成長するが、大きな形態変化をすることがない(無変態)昆虫である。そして、シミは糞によって書

籍を汚損することはあるが、その口は生涯にわたって紙の表面をなめるようにかじりとりことはできても紙を穿孔することはない構造になっているという。それに関わらず、長年にわたって洋の東西を問わずシミが書籍害虫の代表格であると誤解されがちであったのは、シバンムシ科(Anobiidae)の成虫が3mm内外であるのに対して、シミ科(Lepismauidae)の成虫が体長8~9mm内外であるぶんだけ、人目につきやすかったことも無関係ではないようだ。偶然、書物の中でシミを発見した者が、料紙にも虫喰い穴があることに気づいていた場合、両者の間に因果関係があると錯覚してしまっても不思議はないだろう。

それでは、シミの存在のおかげで一時的責を免れていたものの、写経を含む紙資料を縦横無尽に食害する張本人であることが確認されているシバンムシとは、どのような昆虫なのだろうか。日本での名称「死番虫」は、英語名「Death-watch beetle」(本来ならば、「死時計虫」を訳したものが定着したと考えられている。日本で書籍を加害するところが確認されているシバンムシには、フルホンシバンムシ(*Gastrellus immarginatus* MULL.) (図4)や、ザウテルシバンムシ(*Falsogastrulus sauteri* Pic) 、タバコシバ

ンムシ(*Lasioderma sericorne*)、ジンサンシバンムシ(*Stegobium paniceum*)などが挙げられる。タバコシバンムシやジンサンシバンムシは、各種の貯蔵穀物や家具などの木製品というようにに加害対象が広範囲であるのに対して、フルホンシバンムシや西日本に多く分布するザウテルシバンムシの加害対象は、書籍であることが多いとされている。フルホンシバンムシの体長は、終齢幼虫のときに5mm内外である。ザウテルシバンムシの方が、やや小型で体型も短い。また、フルホンシバンムシの幼虫は、他のシバンムシの幼虫よりもやや細長い(図5)。

シバンムシは、幼虫でいる間に書物内



【図4】フルホンシバンムシの成虫(体長 約3mm)



【図5】フルホンシバンムシの幼虫(体長 約5mm)

部を不規則に穿孔食害する。また、成虫になつてからも被害材から脱出する際には、穴をあける。孔道の直径は、1mm未満であるが、いくつもの孔道がであうと結果的には大きな虫食い穴を形成することになる。ひどくなると穴の内径にこびりついた排泄物のせいで開くこともままならないような状態のものもある。これは、幼虫が老熟すると孔道内に粉を唾液で固めた蛹室をつくり、その中で蛹になるという過程から生じる。したがって、加害された本を無理矢理開こうとすると、この蛹室の部分から破れることが多い。また、和書の表紙などに用いられるノリ

を好むゴキブリ類(図7)や、帙や表紙などの装丁に使用される繊維を加害するカツオブシムシ類(図8)も書籍害虫として知られている。

先人たちは、このような被害を抑えるために、虫干しなどを行ってきた。そして、二十世紀半ばを過ぎる頃から、臭化メチルや酸化エチレンなどの化学薬剤を用いた燻蒸処理を行って、書籍害虫を含めた文化財害虫を殺虫するようになった。しかしながら、1997年の「オゾン層を破壊する物質に関する第9回モントリオール議定書締約国会議」で決定されたとおり、一部の用途を除いて、臭化メチ



【図6】古写経の虫食い穴。虫孔に沿ってシバンムシの幼虫と思われる死骸がみられる。

ルの使用は2004年末で全廃された。そもそも、薬剤を用いる方法では、はじめは効果があったとしても、しばらくすると害虫はその薬剤に対する耐性を持ってしまう。そして、強くなった薬剤は人体や環境に与える影響も深刻になる。このため、現在は、低酸素処理法、窒素ガス処理法、二酸化炭素処理法、低温処理法、高温処理法など様々な代替法が提示されている。そういった傾向の中で、推進されている新たな方針がIPM(Integrated Pest Management: 総合的有害生物防除管理)である。

この化学薬剤だけに頼らない害虫防除

法は、まず害虫が進入しない環境作りを目指すして、過去の履歴と施設の点検を行い、清掃を徹底して、トラップなどを用いた日常の点検を継続させることを推奨している。ここでは、紙面の都合上、詳しく述べることはできないが、参考文献に掲げてある東京文化財研究所編『文化財の生物被害防止ガイドブック―臭化メチル代替法の手引き(平成15年度版)―』(東京文化財研究所(2003))を参照していただきたい。



【図7】ゴキブリによる表紙の食害

【主要参考文献】

- ・東京文化財研究所編『文化財害虫事典』クバプロ(2001)
- ・東京文化財研究所編『文化財の生物被害防止ガイドブック―臭化メチル代替法の手引き(平成15年度版)―』東京文化財研究所(2003)
- ・酒井雅博「シバンムシ」『家屋害虫辞典』所収、日本家屋害虫学会(1995)

【執筆者紹介】

吉川 也志保(きつかわ やしほ)
東京都生まれ。フランス国立図書館保存部でのインターンを経て、保存環境調査法などを学ぶ。一橋大学大学院博士後期課程に在学。研究テーマは、古典籍保存の技術と歴史。現在、東京文化財研究所保存科学部の協力を得て、様々な書籍文化財の保存環境を調査中。



【図8】ヒメマルカツオブシムシ(Anthrenus verbasci(Linnaeus))の幼虫(終齢期に体長4mm内外。東京文化財研究所編『文化財害虫事典』クバプロ, 2001年, p.65より)

寺院紹介

金剛寺

天野山金剛寺は大阪府河内長野市天野町にある真言宗御室派の古刹で、その境内は国の史跡の指定を受けています。寺伝によれば奈良時代行基の開創とされますが、平安末期の承安年間（一一七一―一一七五）、阿観（一二三七一―二〇七）が再興を志して後白河法皇に奏上し、法皇が高屋憲貞に造営させる以前のこととは明かではありません。治承二年（一一七八）には金堂が建立され、同四年（一一八〇）八月、在地の有力者源貞弘が私領を寄進したことにより経済基盤が築かれました。貞弘の寄進状によると本寺は鳥羽院の第三皇女八条院暲子内親王（一一三七―一二二二）の祈願所であり、一切経の奥書にも「河内国田井御庄八条院御領」「大宝積経」巻二〇一と同寺と八条院暲子との関連を伺わせる記述が見られます。その後、建久九年（一一九八）には仁和寺北院の末寺となり、また八条院所領が南朝方の大覚寺統に伝領され南朝との繋がりが深まって、後村上天皇（一二三二―一二三八）により食堂が行在所とされました。『大般涅槃経』『大般涅槃経後分』の奥書には正平十四年（一二五九）、後村上天皇が同経を披見されたことが記されており、これら経巻は早くより重要文化財に指定されています。その他金剛寺には国宝『延喜式』三巻や『延喜式神名帳』一卷をはじめ、多くの古文書・古



金剛寺本堂

記録・古画等が蔵されています。

本プロジェクトの調査対象である一切経は平安末期から鎌倉後期にかけて断続的に書写されたもので、弘安九年（一二八六）七月付の「田井庄大饗郷天野一切経田里坪付注進案」（『金剛寺文書』）には大饗郷内の隼人竈里・浮田里に合わせて一町三〇歩の一切経田があつたことが記されており、これら一切経の作成が確固とした経済的基盤に支えられたものであつたことが知られます。現存する四五〇〇巻余りのうち三〇〇巻近くに漉き返しの料紙が用いられていることや、平安時代以降の一切経書写の指針となる『貞元新定釈教録』にみられない經典一一種が伝存していることは金剛寺一切経の大きな特色です。このように金剛寺は多くの貴重な遺例と大きな謎を今に伝えています。

（上杉智英）

調査日記

金剛寺

一口に資料調査といっても、色々と苦労があります。

まず調査先への移動です。金剛寺の場合は大阪南部の河内にありますから南海線河内長野駅を目指してみますが集まります。そこから路線バスで三十分弱の山間部です。調査員の主力はほとんど東京在住のもので占められていますので、交通費も馬鹿にはなりません。関西在住の人でも京都周辺ともなると、いつもよりだいたい早起きをしなければなりません。このように寺院の調査は近隣の大学の図書館で調査を行うのとは最初から違うのです。次に資料を撮影するために機材やこまごまとした道具を揃えなくてはなりません。デジタル撮影をするためのカメラはもちろんのこと、画像データを処理し、保存するためのパソコン、資料を置くための撮影台、カメラを取り付けるスタンド、文化財撮影のためのライトなどがあ

ります。

と、一般的な撮影のマ



調査風景

ニユアルにはこれくらいのもので大丈夫なかもしれませんが、実際の撮影に必要なものはまだまだあります。それは撮影を円滑に行うのに不可欠な小道具たちです。資料の端を押さえるガラス棒や正しい色を示すカラーチャートは必須アイテムですが、資料を押さえる様々なおもしろい大切なもので、資料の形状によって、三種類ほどのものを使い分けるくらい神経を使っています。これらの小道具はもともと資料撮影用のものではありません。なかには自家製のものさえあります。

そして、ついに撮影が行われるのですが、ここからが一番の注意が必要です。文化財でもあり、それ自体がデリケートな薄い紙で出来た資料ですので取り扱いには最善を尽くします。ここが新人の調査員にとって最も緊張する時であり、ベテラン調査員の厳しい指導の目が光るところです。なによりも資料の保全を第一に考えること、そのための労力は決して惜しまないことなどが叩き込まれます。

このように資料調査とは苦労ばかりの話のように聞こえるかも知れませんが、決してそうではありません。それは大学の図書館では得られない生の資料に触る喜びがあるからです。なかには新発見の資料に出くわすこともあります。そういったことは何事にも代え難い興奮を呼び起こします。

（能島寛）

寺院紹介

七寺

七寺は大須観音のすぐ近く、名古屋市中区門前町にある真言宗智山派の名刹です。正式には稲園山正覚院長福寺といい、天平七年（七三五）に行基によって尾張国中島郡萱津の地に正覚院が開創されたのが始まりです。ついで延暦六年（七八七）には河内権守の紀是広により七区の精舎、十二の僧坊が建立されました。その七堂伽藍が七寺という呼称の由来となっています。

仁和三年（八八七）七月の大地震や、天慶四年（九四二）の平将門と藤原純友の二つの乱により荒廃しましたが、仁安二年（一一六一）、勝幡城主であった尾張権守大中臣朝臣安長が亡くなった娘の菩提のために、その婿豊後守親実とともに寺域を稲沢市七ツ寺町に移し寺号を稲園山長福寺と改め、七堂伽藍と十二僧坊を再建し阿弥陀如来とその脇侍、観音・勢至の二軀を奉納しました。またこのとき一切経奉納も発願し、安元元年（一一七五）正月から治承二年（一一七八）八月に至る四年間に一切経を書写させました。これが現在、本プロジェクトで調査している「七寺一切経」です。

安長が建立した寺塔は、その後の建武の兵乱で大半を焼失しましたが、天正十九年（一五九二）に清洲の豪族であった鬼頭孫



七寺本堂

左衛門吉久が太閤秀吉の命を受け、寺域を清洲に移し本堂を再建しました。

慶長十五年（一六一〇）、征夷大將軍家康の清洲城より愛智郡名護屋への移転ともなつて、七寺も翌年、名護屋城の南日置郷（現在地）に再度移築されました。

明治十二年（一八七九）七月に総本山智積院末になり、明治四十四年（一九二五）には準別格本山に昇格しました。

不幸にも昭和二十年三月十九日、太平洋戦争の戦火により、わずかに経蔵一棟を残して全てを焼失しました。このとき戦火を免れた観音・勢至の二軀及び勢至の光背、唐櫃入一切経は昭和二十五年に改めて国より重要文化財の指定を受けて現在に至っています。

（興津香織）

調査日記

七寺

七寺の調査は通常九時に境内集合で暮を開けます。調査は御住職の御厚意で庫裏の二部屋をお借りして行われます。一方の部屋では調査の記入、『大正蔵』との校勘作業。もう一方がデジタルカメラによる撮影とそのデータ処理です。両部屋とも空調が効き非常に快適な内に撮影機材が組み立て、パソコン・プリンターがセットされ、また机の上には薄様が敷かれ、筆記用具・調書・スケール・刷毛等が整然と並べられていきます。庫裏が概ね調査部屋へと姿を変えた頃、経蔵から唐櫃を運び出します。

七寺一切経の唐櫃について、その工芸的手法と美術史的価値は早くから喧伝されているところで、『尾張史料 七寺一切経目録』所収の「七寺一切経唐櫃小考」にもその美術工芸的価値や寸法等が詳細に述べられています。ちなみに七寺の経蔵の棚は上・中・下の三層構造になっており、中・下層の唐櫃はそのまま取り出せますが、上層のものとなると一人が棚の上に登り下の数人でそれを受け取るという作業が必要となります。細心の注意と最大の力が必要な作業であり、御住職の見守られる中、重要文化財の重さを両手に感じつつ慎重に庫裏へと運んでいきます。唐櫃を運ぶにあたり



七寺経蔵、明治5年(1872)建造。寄棟レンガ造り。第二次大戦時の空襲を経て現在に至る。

櫃によって重量の差があることに気付きます。これは勿論唐櫃自体の重さの差異ではなく、中に納められている經典の装丁に由来するものです。唐櫃を運ぶことにより折本の利便性が繙読だけでなく収納にも及んでいることを実体験として改めて感じさせられます。

いずれの調査もそうだと思いますが、その醍醐味はやはり実物に触れることにあり、そこには活字・写真等では拾いきれない多くの情報が溢れています。平安末期の写経に触れることのできた僥倖と、戦火の中経典・唐櫃を避難させた先人の労苦に思いを馳せつつ七寺での一日は暮れていきます。

（上杉智英）

今後の活動予定

詳細につきましては今後、国際仏教学大学院大学の公式ホームページにて随時紹介していく予定です（URLは奥書参照）。お問い合わせ等は、学術フロンティア実行委員会までお願いいたします。

◇公開研究会◇

※タイトルは仮題のものもあります。

場所… 国際仏教学大学院大学

第1回 5月27日（土）

落合俊典（本学教授）

「一切経と一切経音義」

箕浦尚美（研究員）

「玄應撰『一切経音義』の日本現存写本について」

上杉智英（本学博士課程・研究補助員）

「日本古写経中の『往生礼讃』」

第2回 10月14日（土）

宇都宮啓吾（大谷女子大学助教授）

「『大乘起信論』の古点本について」

池 麗梅（研究員）

「金剛寺本『餓鬼報心経』について」

佐藤もな（研究員）

「『七女経』古写本に関する諸問題」

第3回 11月18日（土）

木村清孝（本学教授）

「金剛寺本『大乘起信論』の思想的特徴について」

ついでに

青木 進（研究員）

「『木槵子経』と『木槵経』」

林寺正俊（研究員）

「日本古写経中の『五王経』について」

◇公開国際シンポジウム◇

日時… 12月2日（土）

Ｌ・シュミットハウゼン

（ハンブルク大学教授）他

◇出版物◇

日本古写経善本叢刊 第二輯

『大乘起信論』

学術フロンティア

「奈良平安古写経研究拠点の形成」スタッフ紹介

研究代表者

今西順吉（国際仏教学大学院大学教授・国際仏教学院理事長）

研究分担者

原 實（国際仏教学大学院大学教授）

Hubert Durt（同・教授）

津田真一（同・教授）

木村清孝（同・学長、教授）

アレクスフロリン（同・教授）

落合俊典（同・教授）

赤尾栄慶

（京都国立博物館保存修理指導室長）

高田時雄（京都大学人文科学研究所教授）

梶浦 晋

（同・附属漢字情報研究センター助手）

Christian Witten

（同・附属漢字情報研究センター助教授）

宇都宮啓吾（大谷女子大学助教授）

大倉孝昭（同・教授）

中川 優（和歌山大学教授）

村川猛彦（同・専任講師）

研究協力者

佐藤愛弓

（日本学術振興会特別研究員（PD））

能島 寛

（浄土真宗本願寺派宗学院研究生）

三宅徹誠（京都大学大学院博士課程）

林 敏（国際仏教学大学院大学博士課程）

末木康弘（国際仏教学大学院大学附属図書館副館長）

研究員（PD）

青木 進・林寺正俊・箕浦尚美・

佐藤もな・池 麗梅

研究補助員（PA）

興津香織・上杉智英

※所属機関・身分は平成18年3月現在。
なお、大谷女子大学は平成18年4月より
大阪大谷大学となります。

次号紹介

*掲載予定

《古写経紹介 その二》

《蔵の中》 トピックス

七寺経蔵や古写経の紙などの素材について、新しい視点から切り込んで紹介致します。

《寺院紹介》 西方寺

その他、古写経に関する新鮮な話題について掲載致します。

文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

いとくら 創刊号

平成18年3月31日発行

編集・発行

国際仏教学大学院大学

学術フロンティア実行委員会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-3-23

URL: <http://www.icabs.ac.jp/frontia>

E-mail: koshakyo@icabs.ac.jp

印刷 株式会社 高山